

よりも自分の今の太宰の官舎の方が優よっている」と詠う裏には、賈誼と自分の今の状況を比して白居易のように詠えない現状を敢えて「優」という一語で断言することで自分を慰めていると解釈すべき所ではないかと考える。

つまり『菅家後集』の詩作品の配列から考えて、この詩は左遷後二年目の秋、帰還の望みも絶たれ、(翌年二月には命を落としている。)筆者が既に論じてきたように「諦念」と仏に我が身を託すことで、あの世(現世の苦悩を超越した所)に心の安寧を得ようとする状況下で詠作されたはずである。

だからこそ、賈誼のように召し還される状況は自分にはないと思う念が屈折した形で「優」の一字に込められているのではないだろうか。それは前述の『史記』「屈原・賈生列傳第二十四」の最後の一文にある

讀服鳥賦、同死生、輕去就。又喪然自失矣。(賈誼の「服鳥の賦」を読むと、かれは死と生を同じく達観し、いずれに就くかを氣にとめなかつたのに、と思うと、こんどは何だか自分を見失しなつた氣がするのである。

〈注〉(「賈誼の本心を誤解していたのかとも思う」と解してもよい)

(本文は『史記會注考證』本に拠り、解釈は、岩波文庫『史記列伝二』に拠る)

司馬遷の賈誼に対する心情、それは、長沙に流されていた時、自己を慰めるために詠作した「鵬鳥賦一首」のなかで賈誼が鵬鳥の口を通して世俗を超越して生きることの重要さを語らせた。その心情と、その詠作から間もなく文帝より召し還されることに応じたその賈誼の心情に不可解さを呈する所感とも換言できようが、その心情に道真のそれと重なるもの、共鳴するものがあったのではないかと思う。

そして一方で、賈誼を長沙に左遷した「文帝」のことから、道真は「宇多上皇」や「醍醐天皇」の事に思いを馳せていたのではないか。それでいながら、賈誼と異なつて道真自身は「醍醐天皇」に召し還される夢も叶わぬ